



Research Center for Language, Brain and Cognition
Open Lecture Series on Language, Brain and Cognition

東北大学大学院国際文化研究科附属言語脳認知総合科学研究センター

第4回「言語・脳・認知」公開講演会

文化的認知と言語コミュニケーション行動 —日本語に映し出される場の論理—

講師：井出祥子先生（日本女子大学名誉教授・東北大学客員教授）

Speaker: Sachiko Ide, Professor Emerita, Japan Womens University / Tohoku University

日時：2008年6月11日（水）午後1:30～3:00

Date: 1:30-3:00pm, Wednesday, 11, June 2008

使用言語：日本語

Language: Japanese

場所：川内北キャンパスマルチメディア棟6階ホール

Venue: Multimedia Building 6th Floor Hall, Kawauchi-kita Campus, Tohoku University

来聴歓迎

Admission free

要旨： 20世紀は科学の世紀と言われてきた。科学を基礎として、進歩発展という概念のもとに歩んできた地球の繁栄は、現在、その限界が指摘され、環境問題をはじめ多くの問題に直面している。21世紀の課題は、すべての分野でこれらの諸問題を解決することを志向することであろう。その一つの方法は、地球上の異なる人々の相互理解、共生、共創を目指すため、普遍性への探求を超えて、文化をも視野に入れた探求へと研究の視点をシフトすることであろう。

西欧で創設された科学的考え方の一つとして、言語をコミュニケーションとの接点で考察する語用論について考えてみよう。その主たる理論として知られるグライスの会話の公理、発話行為理論、ポライトネス理論、関連性理論等は、いずれも普遍的なものとして考え出されたものである。これらに共通する前提は、話者「個人」が意思を持ち、それを聞き手に伝えるというものである。話者・聞き手を独立した一人の「個人」であることを前提とする考えは、近代西欧の啓蒙主義、人間中心主義の発展の中で生まれたものである。

しかし、日本語の敬語使用をポライトネスの理論に倣って話者個人の意思による戦略として捉えようとしても、母語話者としての私たちの直感に反してしまう。「個人」の意思が発話の動機であるという語用論の前提は、日本語に照らしてみるとそぐわないことが多い。敬語使用の根底にあるイデオロギーは、個人主義ではなく、個人は場の中に埋もれる一つの要素でしかないと考える「場の論理」である。そのようなイデオロギーの源は、すべては関係の中に存在するという「縁起」という概念、および「無我」を旨とする仏教にさかのぼる。

本講演では、清水博の「場の論理」を援用しつつ、日本語の敬語使用、決まり文句、やりもらい表現、人称代名詞、談話の諸現象等がいかに日本文化を基底にしているかを論じる。これは、西欧で産出された諸語用論が個人主義の社会を前提としているのに対し、江戸時代に遡る「わきまえ」のフィロソフィー、仏教思想を前提とした日本文化である「場の論理」による語用論の提示である。「場の論理」は、「直線的な (linear)」思考方法を基とする西欧の合理性・論理性とは大きく異なり、二重生命的思考 (dual mode thinking) によってのみ理解することができる。直線的から二重生命的への科学的思考のパラダイムシフトは、清水博の唱えるように「天動説から地動説」への転換ともいえるものである。



問い合わせ先 Send inquiries to:

東北大学大学院国際文化研究科附属言語脳認知総合科学研究センター

Tel: 022-795-7842, Fax: 022-795-7850

E-mail: natsuha@mail.tains.tohoku.ac.jp